

### ディレクトフォース

三菱商事の見学では、国際人としてどのようなべきかについて学ぶことができました。三菱商事の社員の方がおっしゃっていたことで一番印象的だったのは、「海外に行くのが全てではない」ということです。確かに、国際性が重要視される現代には、留学することが一種のステータスとなっている風潮があります。しかし、確かに海外に行くだけでは自分を変えることはできず、こちらから積極的に相手を知ろうとしなければ、何も意味はありません。逆に言えば、ずっと日本にいたとしても、国際ニュースを見て海外の情勢に対する理解を深めたり、日本にきている外国人と会話をしたりするなどして、世界のことをよく知る「国際人」になることができます。「自分から相手にアプローチして、相手のことを知り、できればこちらのことでも知ってもらおう。」これこそが国際人になるための第一歩であると思います。そして、そうすることでやがて世界の様々な文化や習慣に精通し、受け入れていくことができる真の国際人になることができると思うのです。

留学することは確かに環境を整え、国際人になるための大きな手段であると思います。しかし、それはひとつの「手段」でしかありません。本当に大切なのは、三菱商事の方のおっしゃっていた、「いかに刺激を受け、成長できるか」なのではないでしょうか。私は日本国内という国際人になるためには刺激が少ない環境で、自ら刺激を探すことで、国際人としての資質を磨いていきたいと思っています。

### 東京大学オープンキャンパス

私は、東大のオープンキャンパス、実際に東大に通っている先輩方の話を通して、もっと多くの大学を見てから進学する大学を選ばなければいけないこと、もっとコミュニケーション能力を高める必要があるということ学びました。

東大のオープンキャンパスでは、主に理学部の見学をしました。その中でも、特に印象的だったのは、いま自分が一番興味を持っている化学科の研究室でした。様々な研究室を見たのですが、そこでは、「高速で動く小さな物体を瞬時に識別する」といった物理に近い研究や、「化学的に生命活動を分析する」生物に近い研究、「透明で、電気を流す素材を作る」という工学部に近い研究など、今まで理学部の研究室を見たことがなかった私がますます理学部のイメージをつかみにくくなってしまふほど幅広く、レベルの高い研究が行われていました。この研究室以外にも、国際レベルで行われている素粒子の研究や、原子の起源についての公演を聞き、東大のレベルの高さを知ることができました。世界最先端の実験に参加できるのも、東大の強みであると思います。しかし、実は私は大学の研究室といえば、中学生の時に東北大学の工学部を見たことしかなく、東大のレベルの高さは感じられたものの、他の大学との比較はできませんでした。東大以外にも、他の分野で進んだ研究をしている大学があるかもしれません。他の大学でどのような研究をどれくらいのレベルで行っているのかももっと知る必要があります。オープンキャンパスに行くなどして、もっといろいろな大学について知りたいと思いました。

学部説明会では、理学部、工学部の説明を続けて聞いたことで、この二つの違いをより明確にすることができました。両者の大きな違いは、工学部は「社会に役立つ材料やしくみを追究、開発する」というのを目的としているのに対し、理学部は「実用性とは無関係に、様々な研究をする」というのを目的としているということでした。この両者の研究内容は「理工系」と組み合わせると言われるほど似通った部分も多く、私は、この二つのうちどちらの動機で研究をしたいかずっと迷っていました。しかし、このオープンキャンパスに参加したことで、研究の動機はどちらでも良いような気もしてきました。どちらに行っても全く世の中の役にたたない研究をするわけではなく、また、どちらも自分に興味のある研究ができると感じたからです。本当に重要なのは、自分が一番やりたい研究をしている大学、研究室を見つけることだと思います。東大の理学部だけでなく、ほかの大学の研究も見て、実際に自分がやりたい研究テーマを見つけていきたいです。また、実際に東大に通っている先輩方の話を聞き、研究したい内容を本格的に決めるのは大学院からでも良いことがわかりました。通っていた大学の大学

学院とは違う大学院を選ぶ人も多いらしく、ある程度の大学に行ってから、自分のやりたい研究を行っている大学の大学院に行くのも一つの選択肢であると感じました。まだ時間はあるので、よく吟味して研究の場である大学院を選びたいと思います。

また、東大に実際に通っている先輩の話聞いて、研究者になることの大変さと、大学生活の大変さも知ることができました。まず、研究職になるには、大学院で修士課程、そして博士課程を取らなくてはいけないそうです。そして、この課程をとっても、評価されるような論文を書き、周囲に認められなくてはいけないそうです。大学院に行く人は多くても、研究者になれる人は限られています。今の化学部での活動を通し、論文を書くのになれたり、いろいろな研究のアイデアを考えついたりする訓練をしていきたいとおもいます。教授になり、自分の研究室を持つようになるためには更に多くの過程を経る必要があるそうで、実際に研究職になるとすると、それまでの道のりはとても厳しいのだと感じました。ちなみに、東大や京大で修士号や博士号を取った方が研究者になるには有利だそうです。

また、大学ではコミュニケーション能力がとても重要になってくるそうです。仲の良い友人がいて、就職活動の時によい就職先を教えてくれたり、新しく課題がでたことや、講義の変更について知らせてくれたりするそうです。周囲との関係が良いほうが研究室に残りやすいのも事実だそうです。もちろん、大学時代の友人は生涯のかけがえのない友人になると思います。実際、私の親が現在でも付き合っている友人のほとんどは、大学で知り合った友人です。人との関係より自分がやりたいことを優先しがちな私は、今のうちからもっとコミュニケーション能力を身につけていく必要があると思います。学校行事や部活、普段の学校生活の中で積極的に人と関わり、コミュニケーション能力を高めていきたいです。

東大見学会を通して、東大の強みやよさはもちろん、今後の進路決定にも大きな影響を与える大学選びの基準を見つけることができました。私は、「理工系の学部で、自分のやりたい材料科学の研究が盛んな大学」に行きたいと思います。そして、もうひとつこれに、「研究者になれなかったとしても、それ以外の自分の就きたい職業に就ける大学」という基準も付け加えたいと思います。この見学会を通してつくづく感じたのは、研究職に就きたい人のあまりの多さでした。周囲の二高生だけでも研究者を目指している人が多いのに、日本全国、世界全体には、いったいどれだけの研究職を目指している人がいるのでしょうか。理工系の学部で修士への進学率は八割超、約半数が博士へ進学するということから、いかに多くの人が研究職を目指しているかということを知ることができます。そして、その中で実際に夢を叶えられるのはほんのひと握りです。現実的な視野を持ち、「夢と現実のバランス」のとれた目標を持つことが重要だと思いました。この見学会で学んだことを生かし、夢を追いつつも、現実へのフィードバックができる大学を選びたいと思います。